

テーマ2

設計開発を変える開発支援サービスの 今と展望

3Dプリンターから始まるモノづくり 革命をビジネスチャンスに —カブク稲田雅彦氏に聞く

*いなだ まさひこ:「モノづくりの民主化」を掲げて2013年、株式会社カブクを設立。3Dプリンティングによるデジタルプラットフォームを立ち上げる。トヨタ自動車、ホンダのパーソナルモビリティへのカスタマイズパーツの提供、自動運転プラットフォームを提供するティアフォー社の自動運転EVのデザイン・設計・製造など、さまざまな企業と協業し、高い注目を集めている。2017年9月に東証一部上場大手メーカーである双葉電子工業からのM&Aにより連結子会社化を行う。東京大学大学院修了(コンピュータサイエンス)。大学院では人工知能の研究に従事。新卒にて博報堂入社。入社当初から、さまざまな業種の新規事業開発、総合コミュニケーション戦略立案、クリエイティブ開発を行う。カンヌ、アドフェスト、ロンドン広告祭、TIAAなど、受賞歴多数。大阪出身。主な著書に「3Dプリンター実用ガイド」(共著、日経BP社刊)がある。

カブクの行っているサービスの1つにKabuku Connectがある。製造業向けの開発総合支援を行う設計・製造サービス事業なのだが、その具体的な内容について創業者・取締役会長の稲田雅彦氏に聞いた。(石川憲二)

「わかりやすく言えば、設計・製造工程などのアウトソーシングを考えている企業に対して、開発を総合的に支援する設計・製造サービスになります。重要なのは、ただ仲介するだけでなく、企画設計から関わったり、専門の製造アドバイザーが製造物の要件に合わせて仕様や工法の提案したりしながら、最適な結果に導いていく点です。しかも、最終製品を取り扱うこともあり、製品のPL(製造物責任)は当社で担保することもありますので、アウトソーシングの経験が少ない会社でも安心してお任せいただけます」

切削、射出成形、3Dプリンターなど多様な製造方法に対応

2016年にスタートしたKabuku Connectは、すでに国内で最大級の規模を誇る開発総合支援サービスへと成長している(図1)。実際にはどんな企業にとって利用のメリットがあるのか、稲田氏の話を参考にシミュレーションしてみた。

金属部品を生産しているメーカー、ここではA



カブク 創業者・取締役会長 稲田雅彦氏*

社としよう。販路の拡大を図るA社では新たな営業先へのアプローチを続けていたが、その効果があって仕事の打診が来た。ところが、今までまったく扱ったことのないタイプの部品であったため、社内の技術や設備だけで効率的に生産できるか不安だ。経営戦略上は、ぜひ受注したいのだが、リスクを考えると二の足を踏んでしまう。

「そういうときこそ、ご連絡ください。私たちは世界30カ国、約300の工場と提携を結んでおり、切削からプレス、板金、鋳造、仕上げ加工、射出成形、さらに最新のフルカラー樹脂・金属3Dプリンターによる製造にも対応しています。つまり、どんな部品であっても短期間で生産できるのです」

あるいは、次のようなケースも考えられる。

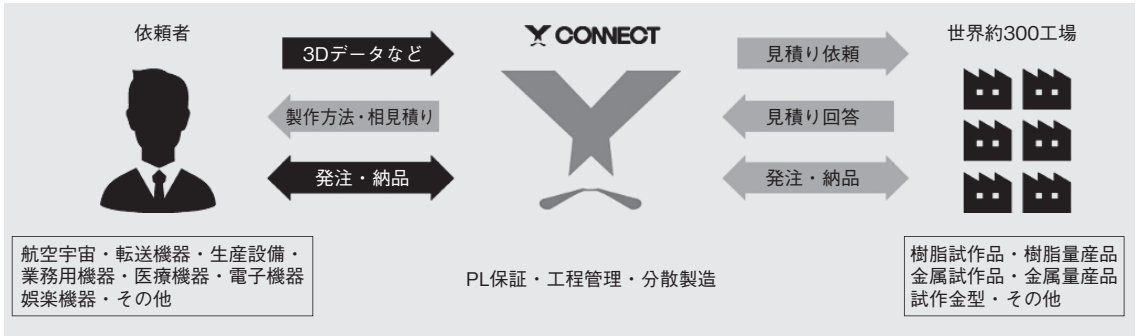


図1 Kabuku Connect

樹脂部品の成形をしているB社は優秀な技術者がいるおかげで製品の品質には定評があった。しかし、工場の敷地が狭いことから生産能力の低さがボトルネックになり、思うように業績を伸ばせないでいる。そんなとき、B社の評判を聞きつけた大手メーカーが大きな取引を持ちかけてきた。しかも、樹脂だけでなく複合材料による部品も手がけられないかというのだ。

「製造業では工程のどこかに弱点があり、そこが発展のブレーキになるというケースがよくあります。そういうときこそ、アウトソーシングの併用を検討すべきなのです。私たちの会社には製造に長く携わったスペシャリストも多いので、難しい課題に対しても最適な答えを出していくことができます」

多くの企業がアウトソーシングをためらう理由の1つに情報漏洩の心配があるが、この点に関しても、十分な対策が行われている。

「Kabuku Connectでは依頼者の情報はアウトソ

ーシングする工場にも非公開とし、厳重に管理しているので心配ありません。私たちは日本を代表する大手メーカーから小さな町工場まで、多くの企業と取引をさせていただいています。その実績こそが、信頼の証明です」

「日本の製造業を強くしたい」という思い

東京大学の大学院で人工知能の研究を行い、「ユーザー側の立場からプロダクトやサービス、事業立上げを行いたい」という目的で就職した博報堂では新規事業開発に携わってきた稲田氏。今の会社を立ち上げたのは、日本の製造業への強い思い入れがあったからだ。

「私の出身地は東大阪です。ご存じの通り、小さな町工場が集積している地域であり、そんな環境で育ったことから、モノづくりにはずっと興味があったのです。このため、起業するに当たっては、それまで多くのビジネスに携わってきた経験を活



図2 rinkakの仕組み